

学術連携シンポで 共同研究の現況報告

東大生研、京都市大

東京大学生産技術研究所と京都市大学の「第1回学術連携シンポジウム」が16日、東京・駒場の東大駒場リサーチキャンパス内にある同研究所で開かれ、「宇宙建築と宇宙構造に関する合同研究会」や「コンクリート内部を貫通する鋼材に生じる劣化の非破

壊評価」など8つの共同研究テーマについて、目的や現況が報告された。

最初に中笠良昭生研所長が

「この連携は、2010年3月に覚書が締結された。その目的は、基幹技術者の育成に長年の実績を持つ都市大と、最先端研究や産学連携に実績を持つ生研が、お互いの特質を生かしながら若手人材の育成や研究協力をしていくことにある」とあいさつした。写真。



続いて、宿谷昌則都市大教授・生研客員教授が「エクセルギーで読む住まい・熱環境」と題して講演した。この中で、宿谷教授は「気候風土にあったパッシブ型技術で、建築環境の基本をつくるのが、決定的に大事である」と指摘した上で、アクティブ型技術については「パッシブ型と調和

し、その良さを引き出せるようなものにするのが重要だ」との考えを示した。

この記事・写真等は日刊建設通信新聞社の許諾を得て転載しています。
無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。

京都市大学グループ

学校法人 **五島育英会**